

## 担任

2021.1.5

2校目となるH中学校の2年目は、2年生の学級担任となった。1年生から2年生になるときにクラス替えがあり、2年生、3年生と同じ学級集団でいくというのが通例である。

担任として何をやるべきか、何ができるかと考えた。いくつか考えたが、学級通信を出すことにした。タイトルは『薫風（くんぷう）』とした。5月の爽やかな風である。毎日出すほどの勇氣はなかった。どのくらい出すという目標を決めたわけではないが、やってみた結果、週に2～3回のペースなら出すことができるということがわかった。結果的に毎回B4判で年間100号出すことになった。これを次の年も続けた。

2年生、3年生と同じ学級を担当した。中学校では、初めて担任をした生徒たちである。中学生には小学生とはまた違った難しさ、やりがいがある。

小学校では、ほとんどの教科の授業を担当が行っている。子どもたちにとっては、学級担任がすべてである。一方、中学校は教科担任制であり、教科ごとに先生が入れ替わる。したがって、生徒にとっては、学級担任の存在は小学校よりも重くはないと思っていた。他にも部活動の顧問の存在もある。

だが、そうでもないと感じるようになった。やはり、生徒にとっては“担任の先生”の存在は大きいのである。ただ、小学校とは違って、各教科の先生、部活動の先生との関わりもあり、生徒が成長していく上ではよいのではないかと思う。先生にも、いろいろな持ち味の方がいる。そういった方と関わることで学べるという側面もある。生徒にとって、親の次に近い存在が教員である。自ずと生徒に与える影響は大きい。

小学校でもそうだが、中学校でも学級担任をしていたからといって、うまくいったことがあったかという、何もないように思う。失敗や後悔ならば数え切れないほどある。ただし、本気だったとは思。生徒一人一人のことを考え、学級のことを考え、思い悩んでいたような気がする。自分のやっていることは間違っていないのか、これでいいのだろうかと常に自問自答していた。

生徒からすれば、こちらの思いが伝わっていないことは多々あったことと思う。それでも、どうにかこうにかやってこられたのは、生徒に助けられていたからである。そのことは、当時も感じてはいたが、今になってさらに強く思う。表現を変えると、教員としての私のミスを生徒がフォローしてくれていたということになる。

保護者にも恵まれていた。学級通信を読み、お手紙をくださる方もいた。自分のお子さんが卒業しても、毎年、丁寧な年賀状をくださる方もいた。お子さんの節目節目で、近況報告をくださる方もいた。どれもありがたく、こちらが励まされるものであった。やはり、中学3年生を担当し、生徒が高校入試を突破し、立派に卒業していく過程を保護者とともに共有できるところが大きい。生徒の成長とともに喜び合えるということになるだろうか。

3校目のS中学校、4校目のF中学校では、学級担任をしないことがあった。やはり担任はいいなあと考えたものである。生徒にとって、担任の先生は何年経っても担任の先生である。